

## 小グループで指導法を学び合う活動を取り入れた 「ダンス指導法授業」の成果

### Results of the “Dance teaching method class” incorporation small-group mutual learning activities of instruction method

宮 本 乙 女

Otome MIYAMOTO

#### Abstract

Background: Dance became a compulsory subject in Japanese junior high schools in 2012. However, it has been reported that junior high school teachers do not have enough ability to teach dance to their students (Nakamura et. al. 2014). In the teacher training course at physical education universities, the students must be enhanced teaching ability as well as dancing ability. The purpose of this study is to analyze the change of the students' awareness toward dance and dance instruction through the course.

Method: The subjects are the students of Sports Sciences and Dance Studies. In each class, in the first half of a class, they experience some dance pieces which are taught at junior high and high schools; in the latter half, they learn dance instruction methods through small-group activities, in which they take the role of a teacher and a student in turns. The survey has been conducted before and after the subjects take this training course. The purpose is to find out their orientation toward dance, confidence in creating and dancing ability, confidence in teaching ability, and enthusiasm for giving instruction.

Results and Conclusions: The result shows that orientation toward dance, confidence in creating and dancing ability, confidence in teaching ability, and enthusiasm for giving instruction are increased after the subjects finished the course. In particular, a significant change is found among the students of sports Sciences, rather than that of Dance Studies. As for Dance Studies, confidence in teaching ability is increased. According to the result, the small-group activities are effective.

**Keywords :** *dance teaching method, dancing ability, teaching ability, junior high and high school*

## I. はじめに

### 1. 大学の教員養成課程・教職課程におけるダンス指導法に関する授業の実態と教員の意識

2012年よりダンスが中学校で必修となったが、中学校教員に対する中村ら(2014)の調査<sup>4)</sup>によれば、中学校では教員のダンス指導力に課題があり、十分な対応ができていない状況である。教員になってからの研修も重要であるが、加えて体育教員を育てる体育系大学ではダンスを踊る力とともに、その指導力を高める必要がある。

2014年度に、関東圏で中学・高等学校の保健体育科教員免許取得が可能な大学をピックアップしたところ

45大学であった<sup>3)</sup>。2015年5月にそれらの大学を対象にそのカリキュラムの実態と担当している教員の意識に関して調査を行ったところ、34大学より回答があり、ダンスの実技の授業が必修で設定されている大学は全体の約半数であった。ダンスの指導法実技がある大学は19、無い大学は2、特別には無いがダンスの授業の中に一部組み込んでいる大学は13であった。しかし、指導法実技の授業は多くの学校が選択半期の扱いであるためダンスの指導法を学ばない学生も多いと考えられる。調査に回答した教員の考えるカリキュラム改善の方向性としては、自由記述の内容などから「教員免許を取得する学生はダンスを必修履修すべきであり、『ダンスを好きにさせ学生自身の踊る力を高める』カリキュラムと、『ダンスを指導する力をつける』カリキュラムの両方が必要である」と読み取ることができた<sup>2)</sup>。

この調査で対象となった大学の中で、本学は、必修のダンス授業が年間で設定されており、また指導法の授業も半期で選択できる、充実した大学であるといえる。

## 2. 日本女子体育大学におけるダンス指導法授業

本学における、ダンス指導法の授業は、舞踊学専攻の2年生向けの「学齢期指導法」および、スポーツ科学専攻の3年生向けの「ダンスメソッド」および健康スポーツ学専攻3年生向けの「ダンスメソッド」である。筆者は、対象の学生が、ダンス指導法の授業を受講した後でダンスに対するイメージがどのように変容するかを調査分析した。扱った題材は学習指導要領に基づいて中学高校生向けに提案されているものを中心とし、学生自身の踊る・作る力をつけると同時に教育者として必要な指導力を高めるための実習や理論を組み込んだ。授業の履修により、舞踊学専攻学生もスポーツ科学専攻学生も、自由で、運動量があり、簡単に、男女にかかわらず学習を行うという、中学生・高校生向けの学習としてのダンスへの認識が深まり、ダンスを指導する自信が高まった。スポーツ科学専攻学生の方が、舞踊学専攻学生と比較して大きな変化が見られ、ダンスへの理解が深まるとともに、ダンスへの志向性が大きく高まった。このカリキュラムは、両方の専攻学生にとって、楽しく意欲を持って仲間と取り組み、自主的な活動ができるものであったが、前半は学習の成果に対する意識は余り高まらなかったという結果を得た<sup>1)</sup>。

ダンス指導法の授業をさらに充実させ、効果のあるものとするために、踊る力とダンス指導力の両面の学習成果を、単元の早い段階から感じさせていくように小グループによる指導法練習や話し合いを取り入れていくことを計画した。調査項目については、ダンス指導に関する学生の理解や意識を探る内容を設定し、授業の成果を検討したいと考えた。また、ダンスを専門とする学生とそうでない学生、教職を希望する者と、していない者の意識の差を検討することにより、学生の実態を考慮した授業内容・方法の開発に向けて示唆を得ることができると考えた。

## 3. 本研究の目的

本研究は、中学校や高等学校の現場で活用できるダンス指導力をつけるために、小グループによる簡単な指導法の実習や話し合いを早い段階から組み込んだ計

画を作り、履修した学生のダンス指導に関する意識の変容を分析することにより、ダンス指導法の授業内容や方法の開発に向けて示唆を得ることを目的とした。

## II. 方 法

### 1. 対 象

#### ① 対象とした授業の目的

「学校教育におけるダンス授業の指導法に焦点を当て、学齢期生徒の心身の発達に合わせたダンス授業の指導内容と方法について、実践を通じて理解する。」

#### ② 対象学生

- ・スポーツ科学専攻および健康スポーツ学専攻3年生「ダンスメソッド」受講生(2015後期)47人…以後はス群
  - ・舞踊学専攻2年生「学齢期指導法」受講生(2016前期)67人…以後は舞群
- ※いずれも、本研究の調査対象としては、1回目と15回目授業の両方に出席した者である。

## 2. ダンス指導法授業試案の作成

授業試案では、本研究の元となる先行実践(2013年度～2014年度)の成果と課題<sup>2)</sup>に基づいて、修正を加えた内容とした(表1)。

先行実践と同様に、15回の内容は、実際に初めてダンスを学習する中学生・高校生を対象とした創作ダンスを中心とする6時間の単元を最初に配置し、中盤は、現代的なリズムの題材、フォークダンスの題材、レッスン力を高める題材を入れた。終盤では、学生全員が教科書から題材を選択し、教師役になる指導法実習を行った。

先行実践では舞群で単元の2時間目から、ス群の単元10時間目から少人数による指導の練習を組んでいたが、本実践においては、両群とも単元の最初の時間から少人数による指導の練習を組み込んだ。早い段階から易しく指導法を体験することで自信をつけて行くことを狙ったものである。また、自ら選択した題材で最終の指導法実習のシナリオを作る過程においても、模擬授業のシミュレーションとして小グループで言葉かけの練習、リズム太鼓の練習を組み込んだ。

1回の授業は、基本的に前半で中学生・高校生を対象とした学習1時間分を体験し、後半に具体的な学習

表1 単元計画

	授業前半の45分 学習者として授業を体験	授業後半の45分 指導者として小グループで
1	リズムダンス 「8844221111」	ダンスウォームアップのインストラクション
2	創作ダンス 新聞紙を使って	ひと流れの動きを引き出す新聞紙の動かし方
3	創作ダンス 「走るー止まる」	極限を引き出す「止まるー止まるー止まる」のインストラクション
4	創作ダンス 「集まるーとび散る」	動きやイメージを引き出す太鼓のたたき方
5	創作ダンス 「スポーツ」	簡単な発表会の方法
6	リズムダンス ケンバーダンスでヒップホップ風に踊る	作品を評価するコメントの仕方
7	リズムダンス ロックのリズムで動くー止まる	ダンスの見せ合い、踊り合いの方法
8	創作ダンス 「ゲルニカ」を題材とするクラス作品	クラス作品作りのポイント
9	創作ダンス 「夏のデッサン」	グループ指導の言葉かけ
10	フォークダンス 「よさこい鳴子踊り」	模擬授業のシナリオ作成
11	フォークダンス 「ヒンキー・ディンキー・パーリ・ブー」	模擬授業のシミュレーション①言葉かけ
12	創作ダンス 学習した課題を連続して「さくら」など	模擬授業のシミュレーション②太鼓のたたき方
13	模擬授業1 15人程度の仮想クラスで、授業の一部分を指導	
14	模擬授業2 15人程度の仮想クラスで、授業の一部分を指導	
15	模擬授業3 15人程度の仮想クラスで、授業の一部分を指導	

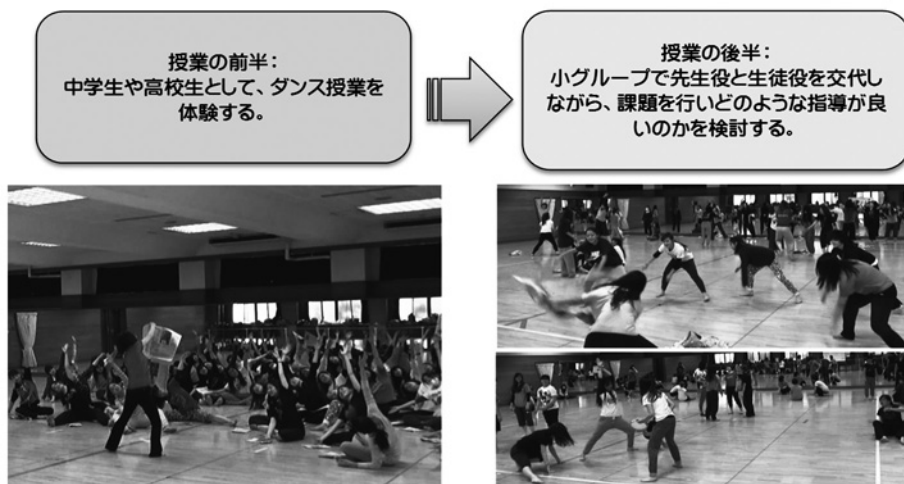


図1 1時間の授業の進め方

指導のポイントをつかむ実習と話し合いや解説を入れた(図1)。

### 3. 調査と分析

#### 1) ダンスに関する意識

ダンスに関する意識について、6つの観点(ダンスに対する意識、ダンスを踊る作力についての自信、ダンスを教えることについての自信、体育におけるダ

ンスの重要性、ダンス指導をすることへの志向、教職への志向)から、19の項目を設定した(表2)。それぞれについて、5段階尺度評価(5「そう思う」～1「そう思わない」)によって回答を求めた。5件法の順序尺度を得点とみなして分析した。調査日のどちらかを欠席した学生の調査を除き、履修前後の比較においては対応のあるt検定を用い、また、ス群と舞群の比較においては対応のないt検定を用いて統計処理を行った。

表2 ダンスやダンス指導に関する意識調査（単元開始時/単元終了後）

調査の観点	調査項目
ダンスに対する意識	ダンスが好きである
	ダンスが上手になりたい
ダンスを踊る作る力についての自信	自分なりのダンスを踊ることができる
	自分なりのダンスを作ることができる
	どんな動きがいい動きかわかる
	リズムに乗って踊ることができる
	自分を表現することができる
学校体育におけるダンスの重要性	ダンスは体育の中で重要な運動領域である
ダンス指導についての自信	体育のダンス指導において大切なポイントがわかる
	中学生や高校生にダンスの示範ができる
	中学生や高校生にダンスの作品作りのアドバイスができる
	リズム太鼓を使って生徒のイメージや動きを引き出せる
	中学生高校生にダンスでどんな言葉かけをしたらよいかわかる
	中学生や高校生に体育でダンスを教えられる
ダンス指導への志向	中学生や高校生に創作ダンスを教えたい
	中学生や高校生にフォークダンスを教えたい
	中学生や高校生に現代的なリズムのダンスを教えたい
教職への志向	大学で教員免許状を取得したい
	将来体育の教員になりたい

分析ソフトはSPSS（IBM SPSS Statistics 23）を使用した。

## 2) 15回の授業についての感想

履修後調査で、「15回の授業を振り返っての感想」を自由記述により調査した。それらを、テキスト型データ解析ソフト Word Mainer（日本電子計算株式会社）を使用して、ス群と舞群の特徴、および、教職の志向のあるなしで、回答の特徴を比較した。

テキストマイニングは、全ての自由記述回答データを、まず細かく分かち書きにする。分かち書きにしたそれぞれを、構成要素と呼ぶ。構成要素を吟味し、句点や読点等の記号や、意味のとれない要素を削除し、また、類義語については元の回答でどのような使われ方をしているかを吟味した上で必要があれば共通の語に置換する。そのような処理をした後に、全体の傾向や、グループによる特徴が見いだせるかどうか、多次元データ解析を行い、対応分析と有意性テストを行って、検討していく手法である。

## III. 結果及び考察

### 1. ダンスに関する授業前の意識の比較

履修前調査におけるダンスへの意識をス群と舞群で比較するために、両群の調査回答の平均点を6つの観点で区切って並べた(表3)。5件法による得点は「5：思う～1：思わない」である。3が中間的な評価であるため、3より高評価であるほどその項目を肯定しており、3よりも低いほどそのイメージを否定していると考えられる。差の検定においてはLeveneの検定により、等分散性のための検定を行った後に対応のないt検定を用いた。グレーの網掛けは3点以下の数値であることを示している。

- 全体として、否定的な回答（3点以下）はス群に多く出現している。また、ス群と舞群を比較すると「将来体育教員になりたい」以外では、舞群がス群より有意に高い数値となっている。
- ダンスに対する意識という観点での項目について、どちらの群の学生もそれぞれの回答の中では高

表3 ス群と舞群の比較 授業前の調査 ダンスやダンス指導に関する意識調査

調査観点	調査項目	ス群 3 年 N=47			舞群 2 年 N=67		t 値	有意確率
		平均値	標準偏差		平均値	標準偏差		
ダンスに対する意識	ダンスが好きである	3.53	1.060	<***	4.94	.239	8.950	.000
	ダンスが上手になりたい	4.11	.814	<***	4.96	.208	6.991	.000
ダンスを踊る作る力についての自信	自分なりのダンスを踊ることができる	2.06	1.169	<***	3.93	1.005	9.101	.000
	自分なりのダンスを作ることができる	1.81	.992	<***	3.52	1.211	8.000	.000
	どんな動きがいい動きかわかる	2.36	1.169	<***	3.69	.941	6.692	.000
	リズムに乗って踊ることができる	3.04	1.083	<***	4.19	.783	6.592	.000
	自分を表現することができる	2.30	.954	<***	3.93	.942	9.032	.000
学校体育における重要性	ダンスは体育の中で重要な運動領域である	3.85	1.083	<***	4.34	.708	2.733	.008
ダンス指導についての自信	体育のダンス指導において大切なポイントがわかる	2.15	1.122	<***	3.21	1.052	5.151	.000
	中学生や高校生にダンスの示範ができる	1.68	.980	<***	2.97	.921	7.166	.000
	中学生や高校生にダンスの作品作りのアドバイスができる	1.68	.935	<***	3.09	.933	7.928	.000
	リズム太鼓を使って生徒のイメージや動きを引き出せる	1.87	.900	<***	2.79	.897	5.377	.000
	中学生高校生にダンスでどんな言葉かけをしたらよいかわかる	1.87	1.076	<***	2.84	.881	5.244	.000
	中学生や高校生に体育でダンスを教えられる	1.81	1.096	<***	2.76	.955	4.932	.000
ダンス指導への志向	中学生や高校生に創作ダンスを教えたい	2.70	1.284	<***	3.61	.999	4.251	.000
	中学生や高校生にフォークダンスを教えたい	2.43	1.211	<***	3.18	1.058	3.526	.001
	中学生や高校生に現代的なリズムのダンスを教えたい	3.00	1.216	<***	3.85	.957	4.174	.000
教職への志向	大学で教員免許状を取得したい	3.87	1.637	<***	4.64	.690	3.039	.004
	将来体育の教員になりたい	3.23	1.591		2.88	1.225	-1.280	.204

い値が出ている。舞群では舞踊専攻であることから入学前から、「好き」であり「うまくなりしたい」という気持ちは強いと推察できるが、ス群においても、このダンス指導法の授業を自ら選択したという姿が現れていると推察できる。

- 3) ダンスを踊る作る力についての自信という観点では、舞群では3点台後半から4点台の数値であるが、ス群では「リズムに乗って踊ることが出来る」が3.09である以外は2点前半か1点台となっており、自信のない者が多いことを示している。特に「自分なりのダンスを作ることができる」は1.81と低い値となっており、創作に自信を持ってない様子がわかる。
- 4) 学校体育におけるダンスの重要性については、ス群3.85、舞群4.34と、共によく意識されていることがわかる。比較すれば舞群が有意に高い。
- 5) ダンス指導についての自信については、ス群は全ての項目で低い数値を示し、特に、直接生徒に対して行う、「示範」「アドバイス」「太鼓でイメージや動

きを引き出す」「言葉かけ」「教えられる」等については1点台である。舞群も他の観点に比較すると「示範」「太鼓で動きやイメージを引き出す」「言葉かけ」「教えられる」が3点未満で、指導に自信が無い学生が多いことを示している。

- 6) ダンス指導への志向という点では、ス群では学習指導要領で示されている3種目について「創作ダンス」2.70「フォークダンス」2.43「現代的なリズムのダンス」3.00であり、いずれも教えたいという思いが強いことがわかる。舞群では「創作ダンス」3.61と「現代的なリズムのダンス」3.85は、4に近いが、フォークダンスは3.18と、他の種目よりはどちらともいえないに、近い。
- 7) 教職への志向について、舞群では、「将来体育の教員になりたい」が2.88という数値で低いが、「免許状を取得したいと思う」は4.64で、ス群の3.87と比較して有意に高い。これは、舞踊の学生のこの授業開始が2年生4月であり、ス群の授業開始が3年の9

月であることも影響していると考えられる（教職免許を取ろうという意志は学年を追って減っていく傾向にある。1例として2017年度4年生の教職課程の登録は大学全体で292人であるが、この学年の1年からの推移を見ると、1年時462人2年時436人3年時は351人であった。（日本女子体育大学学生支援課教務担当者による）。

## 2. ダンスに関する意識の変容

両群の単元前後のダンスに関する意識の変容を図2図3および、表4表5に示した。ス群においては、15回の授業後に、教職への志向以外の項目全てで、有意に高くなった。1点台2点台であった項目も全て3点台以上になっている。ダンスを踊る作る力のうち、

かなり低い数値であった「踊る」2.08「作る」1.81は、授業後には共に3.28と、3点を超え、「いい動きがわかる」「リズムに乗れる」「表現できる」の項目では、3.85、4.00、3.64と、3点台の後半から4点の数値になった。そしてほぼ1点台でほとんど自信の持てなかったダンス指導についても、3.68から4.06と、3点台後半から4点台となり、ここに大きな伸びが見られた。ダンス指導への志向も全て3点台の後半に向上している。

一方、舞群では、ダンスを踊る、作る力の中では、「いい動きがわかる」という、理解の部分で3.69から4.13と有意に向上している。また、授業前の段階で3点以下の項目が目立った指導についての自信の項目は、それぞれ全て有意に向上し、3点台の後半の数値となった。

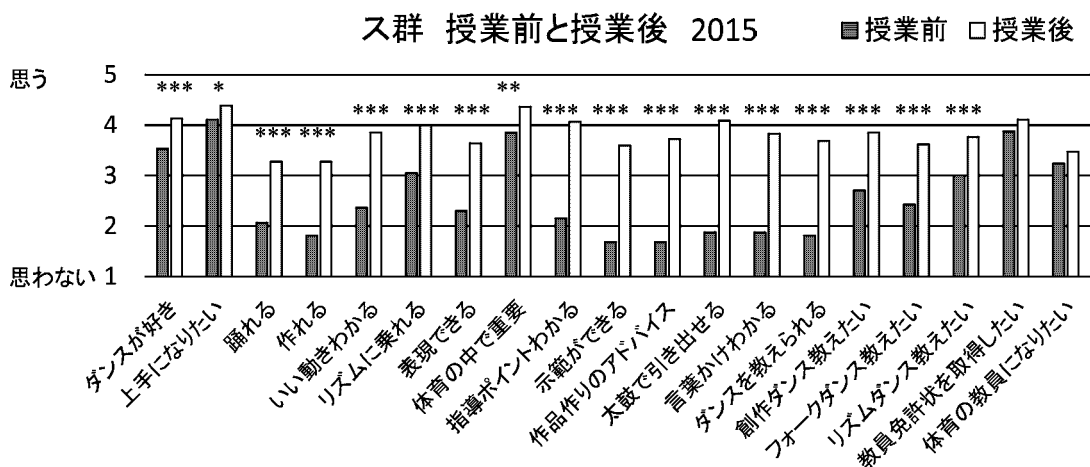


図2 ス群 授業前と授業後の比較

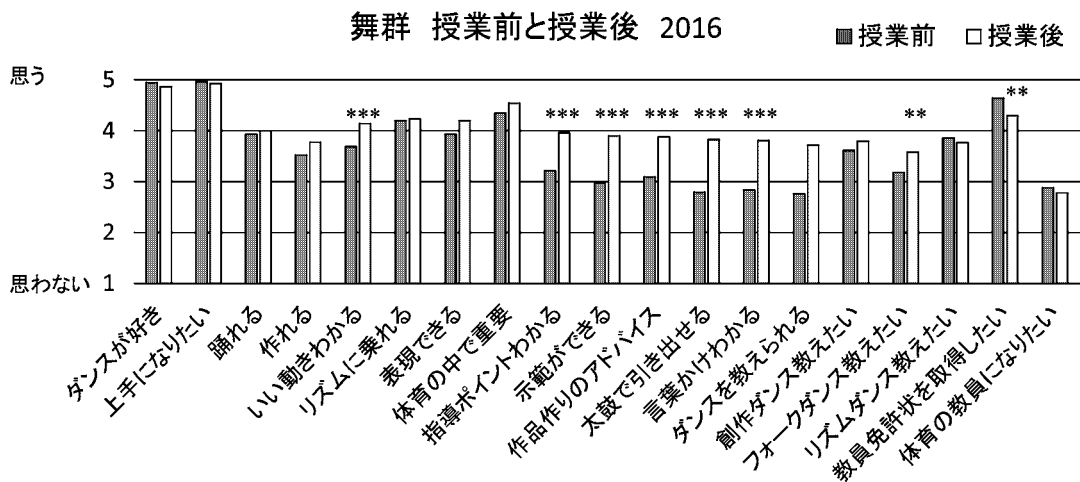


図3 舞群 授業前と授業後の比較

表4 ス群 授業前と授業後の比較 ダンスやダンス指導に関する調査

調査観点	調査項目	授業前			授業後		t 値	有意確率
		平均値	標準偏差		平均値	標準偏差		
ダンスに対する意識	好き	3.53	1.060	<***	4.13	.924	-4.418	.000
	上手になりたい	4.11	.814	<*	4.38	.874	-2.457	.018
ダンスを踊る作る力についての自信	踊れる	2.06	1.169	<***	3.28	1.228	-6.948	.000
	作れる	1.81	0.992	<***	3.28	1.228	-9.493	.000
	いい動きわかる	2.36	1.169	<***	3.85	1.103	-8.414	.000
	リズムに乗れる	3.04	1.083	<***	4.00	.885	-7.047	.000
	表現できる	2.30	.954	<***	3.64	.942	-9.554	.000
学校体育におけるダンスの重要性	体育の中で重要	3.85	1.083	<**	4.36	.895	-3.239	.002
ダンス指導についての自信	指導ポイントわかる	2.15	1.122	<***	4.06	.895	-9.853	.000
	示範ができる	1.68	.980	<***	3.60	.948	-10.825	.000
	作品作りのアドバイス	1.68	.136	<***	3.72	.135	-11.358	.000
	太鼓で引き出せる	1.87	.900	<***	4.09	.747	-15.533	.000
	言葉かけわかる	1.87	.157	<***	3.83	.140	-8.681	.000
	ダンスを教えられる	1.81	1.096	<***	3.68	.980	-9.321	.000
ダンス指導への志向	創作ダンス教えたい	2.70	.187	<***	3.85	.158	-5.633	.000
	フォークダンス教えたい	2.43	1.211	<***	3.62	1.054	-6.472	.000
	リズムダンス教えたい	3.00	.177	<***	3.77	.159	-4.437	.000
教職への志向	教員免許状を取得したい	3.87	1.637		4.11	1.536	-1.503	.140
	体育の教員になりたい	3.23	0.232		3.47	0.223	-1.855	.070

表5 舞群 授業前と授業後の比較 ダンスやダンス指導に関する調査

調査観点	調査項目	授業前			授業後		t 値	有意確率
		平均値	標準偏差		平均値	標準偏差		
ダンスに対する意識	好き	4.94	.240		4.86	.388	1.523	.133
	上手になりたい	4.95	.210		4.92	.267	1.000	.321
ダンスを踊る作る力についての自信	踊れる	3.93	1.005		4.00	.985	-.627	.533
	作れる	3.52	1.218		3.77	1.238	-1.734	.088
	いい動きわかる	3.69	.941	<***	4.13	.796	-4.460	.000
	リズムに乗れる	4.19	.783		4.22	.832	-.287	.775
	表現できる	3.92	.950		4.20	.881	-2.407	.019
学校体育におけるダンスの重要性	体育の中で重要	4.34	.708		4.54	.682	-2.418	.018
ダンス指導についての自信	指導ポイントわかる	3.20	1.056	<***	3.95	.793	-6.745	.000
	示範ができる	2.97	.921	<***	3.87	.869	-7.671	.000
	作品作りのアドバイス	3.09	.933	<***	3.88	.930	-6.071	.000
	太鼓で引き出せる	2.79	.897	<***	3.82	.903	-7.859	.000
	言葉かけわかる	2.84	.881	<***	3.81	.857	-7.827	.000
	ダンスを教えられる	2.76	.955	<***	3.72	.901	-6.978	.000
ダンス指導への志向	創作ダンス教えたい	3.61	.999		3.79	.993	-1.243	.218
	フォークダンス教えたい	3.18	1.058	<**	3.58	.890	-2.994	.004
	リズムダンス教えたい	3.85	.957		3.76	.955	.715	.477
教職への志向	教員免許状を取得したい	4.64	.690	>**	4.30	1.101	3.133	.003
	体育の教員になりたい	2.88	1.225		2.78	1.346	.895	.374

ダンス指導への志向では、低めに出ていたフォークダンスを教えたいという数値が3.18から3.58と有意に高くなった。有意に低くなった項目は「教員免許状を取得したい」であり、授業の影響があるかどうかは不明であるが、先に述べたような学年の進行の影響もあると推察できる。

3. 15回の授業の感想（自由記述）

受講した学生は、15回の授業の終了後「15回の授業を振り返っての感想」を自由記述で回答した。テキスト型データ解析ソフト Word Mainer（日本電子計算株式会社）を使用して、自由記述を分析し、ス群と舞群の比較、および、教職の志向のある群と無い群の比較をした。

行った作業は、以下の通りである。

ス群47人と舞群67人の感想文を分かち書きにしたところ、全628種類の構成要素2706語が抽出された（分かち書きしたものを構成要素と呼ぶ）。そこから、記号（句読点など）と助詞（てにをはなど）を除く削除辞書を使用し、1455語586種類を抽出した。抽出された語の一覧を検討し、さらに削除すべき意味をなさない語や分析内容に不要と判断した84語（しき、よう、して、この、すごく、とって、こんな、ありがとう、ちょっと…）を削除辞書に追加した。さらに、類義語については元の回答でどのような使われ方をしているかを吟味した上で共通の語に置換するべき41語を抽出して置換辞書を作成した（例：楽しかった、楽しく、楽しんで、楽しむ→楽しい、先生側、教師役、教師側→先生役、良かった→よかった 経験、実体験→体験…）。さらに、全体の中で出現頻度が2以上の語を抽出するように設定し、最終的に123種類、767語の構成要素を分析の対象とすることにした。

次に、グループによる特徴が見いだせるかどうか、多次元データ解析を行い、対応分析と有意性テストを行って、検討した。この解析は、指定した質的変数のカテゴリー別に含まれる構成要素の出現頻度区分を、全体の構成要素の頻度分布と比較して有意となるかどうかのテストを行うものである。例えば、質的変数として「専攻」というカテゴリーを選んだ場合、各専攻で特徴的な使われ方をする構成要素は何かを明らかにする。検定結果は数値で表示され、この値が大きい構成要素ほど、その質的変数のカテゴリー内での役割が高いと判断する。また、それが実際の回答文でどう使われたかを対応させることにより特徴的な回答傾向を

知ることができる。

1) 専攻による比較

表6は、抽出された構成要素をそれぞれの専攻別に

表6 専攻別 構成要素 頻度順

順	ス群 上位		舞群 上位	
1	ダンス	35	楽しい	31
2	楽しい	21	ダンス	23
3	授業	20	先生	21
4	できた	15	授業	19
5	先生	11	できた	19
6	動き	10	学べた	16
7	よかった	10	よかった	14
8	苦手	8	生徒	14
9	いろいろな	7	役	13
10	学べた	7	教える	12
11	できる	6	自分	9
12	自分	6	指導	9
13	題材－課題	5	体験	9
14	いく	5	先生役	8
15	やって	5	勉強	8
16	指導	5	人	8
17	今	4	もの	8
18	いろんな	4	教え方	8
19	たくさん	4	大変	8
20	毎回	4	毎回	6
21	先生役	4	いい	6
22	恥ず	3	わかった	6
23	気	3	やって	5
24	最初	3	工夫	5
25	いろいろ	3	みんな	5
26	工夫	3	いく	4
27	勉強	3	たくさん	4
28	教える	3	いろいろ	4
29			実際	4
30			知る	4
31			初めて	4

上位抜粋の情報	
28位まで/92	31位まで/111
217/全数306	314/全数461



表7 専攻による授業の感想の特徴

構成要素(授業の感想分かち書き)×専攻別クロス表の頻度による有意性テストの結果

	ス群			舞群		
	構成要素	検定値	有意確率	構成要素	検定値	有意確率
上位1	苦手	3.2355	0.00	生徒	2.5787	0.01
上位2	ダンス	3.1323	0.00	役	1.9351	0.03
上位3	動き	2.7987	0.00			
上位4	いろいろな	2.4046	0.01			
上位5	恥ず	1.529	0.06			
下位5				恥ず	-1.529	0.06
下位4				いろいろな	-2.405	0.01
下位3				動き	-2.799	0.00
下位2	役	-1.935	0.03	ダンス	-3.132	0.00
下位1	生徒	-2.579	0.01	苦手	-3.236	0.00

表8 専攻による授業の感想の特徴

構成要素(授業の感想分かち書き)×専攻別クロス表の頻度による有意性テストの結果 上位10件の感想

	ス群	検定値	舞群	検定値
1位	ダンスのいろんな動きを知れてよかったです。	0.659	先生の立場と生徒の立場をどちらも体験することができて、楽しかったです。	0.4016
2位	苦手意識のあったダンスが少しできるようになりました。ありがとうございます。	0.5789	教える側は工夫がたくさん必要で大変なことがわかった。	0.3394
3位	いろいろな教師の人のダンスの授業を見てよかった。	0.5712	先生という立場で生徒に教えるという経験ができてよかったです。すごく学ぶことが多かったです。	0.306
4位	ダンスはすごく苦手だったけど、みんなでできる簡単な動きばかりで、苦手なことも忘れて楽しくできた。	0.4804	生徒と先生の両方を体験できて、勉強になったし楽しかった。	0.2507
5位	ダンスの授業の作り方がわかったので実習も安心できる。	0.4422	指導法を実践的に学べて勉強になりました。生徒としてやるのはすごく楽しかったです。	0.2252
6位	今まで学んできたダンスとはまったく異なっていて、本当のダンスを知れたように思う。	0.4241	学校であまりダンス経験のない人に教えるのは大変だなと感じた。これから役に立つと思った。	0.2066
7位	自分自身、ダンスへ少し苦手意識があったが、この授業をとって、意識が変わった。	0.4045	教える側が事前に準備していろいろ想定しながら考えるのは、難しかった。	0.2049
8位	ダンスを通して学年関係なく楽しんで受けられました。	0.3915	生徒と先生役を両方したので、両方の気持ちかわかった。	0.1984
9位	ダンスを全員でやるのが楽しかった。	0.3915	教える側の大変さを知ることができてよかった。どんなところを工夫するといいかなど学べてよかった。	0.198
10位	毎回いろいろなダンスをしていく中で、新しい動きとかも見たりして、そういう動きをつなげていくことでダンスに繋がるのが面白いなと思いました。たくさん動けたので楽しかったです。	0.3754	毎回生徒・教師の事に考え、自分自身がテンションをあげないといけない。	0.1517

頻度の高いものから順に並べたものの上位約1/4を抜粋した。どちらの専攻の上位にも共通して「ダンス」「楽しい」「先生」「授業」「できた」等が見られ、教師としての授業体験とダンスの楽しさを記述していると推測できる。次に対応分析を行い、有意性テストを行った結果が表7である。ス群は「苦手」「ダンス」「動き」「いろいろな」「恥ず」が、舞群では「生徒」「役」がそれぞれに特徴的な構成要素として抽出された。

この解析に用いた構成要素を含んだテキスト文（もとの感想文データ）をカテゴリーごとに検定値の高い順に10位まで抽出し、表8に示した。すなわち、そのカテゴリーの特徴をよく表している順に並んでいる。まずそれぞれの2位までを見ると、ス群は「ダンスのいろんな動きを知れて良かったです。」「苦手意識のあったダンスが少しできるようになりました。ありがとうございます。」と、自分が苦手だったダンスができるようになった、動きを知ることができたと言うことが中心の内容であるのに対し、舞群では「先生の立場と生徒の立場をどちらも体験することができて、楽しかったです。」「教える側は工夫がたくさん必要で大変なことがわかった。」と、教師役と生徒役になって体験したダンスの授業スタイルや教える側の大変さなどに関心が寄せられていることを読み取ることができる。3位以下の文章にも同様な特徴を見ることができる。

## 2) 体育教員への志向による比較

体育の教員になりたいと思うかどうかの回答は、5（思う）28人、4が14人、3が35人、2が11人、1（思わない）が26人であった。このうち、まず、中間点3の回答者を除いた61人を対象として、5または4と回答した34人を「なりたと思う群」、1または2と回答した27人を「なりたと思わない群」として抽出した。その後、1）と同様のステップで分析処理を行った。表9に構成要素の頻度の高い順を、表10ではその分析結果を示した。

表9で、頻度の上位は共通している様子が見られるが、有意性テストの結果（表10）では、体育教員になりたいと思う群では「授業」「先生」という構成要素がその特徴としてあげられ、なりたと思わない群では、「いろいろな」「よかった」「動き」「できた」が上位にある。個別の回答の1、2位を、表11で確認すると、なりたと思う群は「教師を目指す上で必ず役に立つ授業だった。ダンスを楽しいと思えた。」「教師としてどのように行うかをよく考えられたし、先生みたいな指導をしていきたい」、思わない群は「ダンスのいろんな

動きを知れて良かったです。」「初めてのダンスをする生徒に対しての教え方を学ぶことができたのでよかった。」であった。教師になりたいと思う群の回答に、教師として授業をしていくのだという考えがよく現れていると言える。3位以下の回答については教職の志向の有無にかかわらず共通な内容も多いが、表10の有意性テストと併せて考察すると、教師になりたいと思う群が、より具体的に「授業」「教師」について述べる傾向があると推察できる。

表9 体育教員になりたいと思うか

構成要素 頻度順

順	思う 計284	思わない 計237
1	ダンス 25	楽しい 20
2	楽しい 23	ダンス 16
3	できた 21	先生 15
4	よかった 15	授業 12
5	学べた 9	できた 11
6	動き 8	学べた 8
7	授業 8	よかった 7
8	指導 7	生徒 6
9	いろんな 6	役 6
10	先生 6	教える 5
11	教える 6	自分 5
12	人 6	指導 5
13	題材－課題 5	体験 5
14	自分 5	先生役 4
15	勉強 4	勉強 4
16	生徒 4	人 4
17	体験 4	もの 4
18	いい 4	教え方 4
19	教え方 4	大変 4
20		毎回 4
21		いい 4

上位抜粋の情報

19位まで/81	21位まで/76
170/全数284	153/全数237

表10 体育教員への志向の有無による授業の感想の特徴

構成要素(授業の感想分かち書き)×教職志向別クロス表の頻度による有意性テストの結果

	なりたと思う			なりたと思わない		
	構成要素	検定値	有意確率	構成要素	検定値	有意確率
上位1	授業	2.3735	0.01	いろんな	1.7882	0.04
上位2	先生	1.6707	0.05	よかった	1.5953	0.06
上位3				動き	1.5297	0.063
上位4				できた	1.5022	0.0665
下位4	できた	-1.502	0.07			
下位3	動き	-1.53	0.063			
下位2	よかった	-1.595	0.0553	先生	-1.671	0.05
下位1	いろんな	-1.788	0.0369	授業	-2.374	0.01

表11 体育教員への志向の有無による授業の感想の特徴

構成要素(授業の感想分かち書き)×教職志向別クロス表の頻度による有意性テストの結果 上位5件の感想

	体育教員になりたいと思う群	検定値	体育教員になりたいと思わない群	検定値
1位	教師を目指すうえで必ず役に立つ授業だった。 ダンスを楽しいと思えた。	0.2247	ダンスのいろんな動きを知れてよかったです。	0.5459
2位	教師としてどのように行うかをよく考えられたし、先生みたいな授業をしていきたい。	0.2022	初めてのダンスをする生徒に対しての教え方を学ぶことができたのでよかった。	0.2454
3位	すごく楽しかったし、自分の為になる授業だった。	0.1978	話したことが無い人ともかかわることができ、みんなで楽しんで取り組むことができてよかったです。中・高校生相手に、どのように言葉がけをして、いろんな動きを見つけ、ダンスの良さを知ってもらい指導ができるのか知ることができてよかった。	0.2236
4位	教え方など全然知らなかったが、授業を受けるにつれて、進め方や楽しい授業の作り方などがわかるようになってきて楽しかった。	0.1826	いろんなダンスや動きがあって、それぞれに指導する方法があってたくさん学ぶことができた。声掛けや太鼓の使い方も学習出来て良かった。	0.2212
5位	ダンスの授業の作り方がわかったので実習も安心できる。	0.1826	リズムダンス以外でもこんな風に初めてのの人にダンスを教える教え方があるのだと知ってよかったです。	0.1991

## IV. 結 論

本研究は、中学校や高等学校の現場で活用できるダンス指導力をつけるために、小グループによる簡単な指導法の実習や話し合いを早い段階から組み込んだ計画を作り、履修した学生のダンス指導に関する意識の変容を分析してきた。以下の点が明らかになり、大学のダンス授業内容や方法の開発に向けて示唆を得ることができた。

### 1. 明らかになったこと

1) 学生自身の踊る・作る力をつけると同時にダンス指導者として必要な指導力を高める小グループによる指導法実習や話し合いを組み込んだダンス指導法授業により、ス群学生も、もともとダンスの経験と志向性の高い舞群学生も、ダンスを指導する力についての自信を高めることができた。ダンスを踊る作る力、ダンスを教えたいという意識の向上については特にス群の変化が大きかった。

- 2) 自由記述による感想文の分析から、ス群、舞群ともに楽しく生徒役や教師役を体験し学べたと感じているが、ス群に特徴的に見られたのは、自分が苦手だったダンスができるようになった、動きを知ることができた、という内容で、舞群ではス群に比較すれば教師役と生徒役になって体験したダンスの授業スタイルや教える側の大変さなどに関心が寄せられていたことを読み取ることができた。
- 3) 自由記述による感想文を、体育教員になりたいと思うかどうかという視点で比較すると、体育教員への志向の高い群の方が、より強く教師として授業をしていくのだという考えが現れていた。

## 2. 指導内容・方法への示唆

自身が踊る力を持っていると考えられる舞踊学専攻の学生にはダンス学習指導としてのポイントを明確に伝える工夫を行うことで、指導の自信につながるのではないかと、また、スポーツ科学専攻および健康スポーツ学専攻の学生にはダンスに対する苦手意識や恥ずかしさを払拭し、ダンスの楽しさや感動を与えながら、指導力の向上も味わせることで、早い段階から学習成果を感じさせていくことができるのではないかと。

小グループによる指導法実習を毎時間組み込んだ単元構成と、生徒として典型的な授業を受けてその授業の後半に、それに関わる指導法を小グループで学び合うというスタイルの授業の効果が示唆される結果となった。

## 3. 課題

小グループで取り組める指導実習の内容を検討し、必要に応じて増やしていくことと、本研究の成果を他

の体育系大学におけるダンス指導法授業としても活用できるように、必修ダンスを体験しないで指導法の授業を受ける場合の単元作りなどを検討していきたい。

また、この授業計画の成果は、主に学生の意識の変容から捉えてきたが、実際に受講学生の指導力の向上を評価する指標や、卒業後のダンス授業現場に生かされていくかどうかについての追跡も行っていきたい。

## 引用文献

- 1) 宮本乙女, 中村恭子 (2015) 体育系大学における中学校ダンス必修化に対応したダンス指導法授業の検討ーダンス指導法授業を受講した学生の意識の変容を通してー, 日本女子体育大学紀要 45:141-153, 2015
  - 2) 宮本乙女 (2016) 探る, 伝える問いかけから～観る力・踊る力・引き出す力～, 東京都女子体育連盟 第49回全国女子体育研究大会 東京大会報告書, 44-47
  - 3) 文部科学省 (2014) 中学校・高等学校教員 (保健体育・保健) の教員の免許資格を取得することができる大学 (【1】通学課程(1)一種免許状取得可能4年制大学)  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kyoin/daigaku/detail/1287060.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/daigaku/detail/1287060.htm) (参照日2015年3月)
- ※現在このURLでは、最新の年度のもの掲載されている。
- 4) 中村なおみ, 宮本乙女, 中村恭子 他4名 (2014), 中学・高等学校におけるダンス教育推進に向けての調査及び取り組みについての研究, 笹川スポーツ政策研究 3 (1): 230-239.

(平成29年11月24日受付)  
(平成30年1月17日受理)